

はしがき

本書は科学研究費補助金 基盤研究(A)「石造物研究による中世日本文化・技術形成過程の再検討—東アジア交流史の視点から—」(16H01947 研究代表者・市村高男)による研究成果の一部である。このプロジェクトは、2016～2021 年度の5年計画、直接経費 35,000 千円を交付されて開始したが、最終年度にコロナパンデミックに見舞われ、当初の計画通りに実行できず、2年遅れの2023年3月ようやく完了した。

その間、北海道から沖縄に至るまで各地の石造物調査を実施し、国外では中国浙江省・福建省と韓国にそれぞれ4～5回ずつ石塔・採石場の調査を実施した。国内調査の成果の一端は、2019年度に『一條家墓所調査報告書(東福寺本山・芬陀院、廬山寺、妙傳寺)』、2023年度に『中世石造物の三次元画像—撮影・計測調査報告書—』を刊行し、繰り越し年度中に細々と続けた三次元画像計測調査の成果を盛り込んだ三次元画像集増補改訂版の刊行を準備中である。

また、終了直前の2023年1月7～8日には中国・韓国の研究者の協力を得て、『成果報告・国際シンポジウム』を開催したが、あいにく中国・韓国で再燃したコロナパンデミックの影響によって、両国の報告者を招聘することが難しくなったので、提出された原稿を翻訳・代読し、それによって議論を進めざるを得なかった。その点が心残りである。

このように何かと波乱含みのプロジェクトとなったが、国内外の関係者のご協力によって完了させることができた。とはいえ、都合7年に及ぶ歳月は想像以上に長く、その間に病に倒れたメンバーも2～3人に及び、加齢との戦に疲れたメンバーや定年組が増加したこと、それにも増して大型助成金を交付されたことに見合う最低限の責任を果たすためにも、成果の一端を論文集にまとめることを急ぐことにした。

当初の予定では、東アジア編と日本編の2分冊にする計画であったが、原稿の辞退者や締切りに間に合わなかった人もあり、予定した分量に達しなかつ

たこと、そして出版環境の悪化によるコスト高を考慮して、少々厚めになるが1冊にまとめて刊行することになった。7年に及ぶ調査・研究の過程で、関係者の多くが適宜成果を発表していたことを踏まえて、今回の論文集ではあまり明確な枠を設けずに、研究課題「石造物研究における中世日本技術・文化形成過程の再検討」に関連する内容で、それぞれの関心に沿って執筆してもらうことにした。そのため、やや不統一な内容になった嫌いもあるが、関連する内容の論文ごとに、Ⅰ．東アジア比較研究の視角、Ⅱ．古代・中世前期の石造文化、Ⅲ．石造物と地域史研究、Ⅳ．東アジア中近世石造物研究の現状、Ⅴ．石材と一石五輪塔の研究視点、の五つの塊に分け、書名を『石造物と中世史研究—東アジアと列島—』として、当初の研究課題の成果の一端であることを示した。本書が新たな石造物研究の発展に多少なりとも寄与できれば幸いである。

最後に編者として種々ご配慮下された韓国の李根雨先生、中国の劉恒武先生、鹿児島の高津孝先生にお礼を申し上げるとともに、厳しい出版状況の中で本書の刊行をお引き受けの上、編集過程でご助言くださった高志書院の濱 久年氏に深謝するしだいである。

2026年2月27日

僭越ながら編者を代表して

市村 高男